

労働価値説の源流の考察

深澤竜人

はじめに

近年あまり研究・考察の対象となっていないが、経済学の中に「労働価値説(論), labor value theory, labor theory of value」がある。「労働価値説とは?」と改めてまず辞書的な説明から確認すべくある辞書を紐解くと、「商品の価値はその商品を生産するために必要とされた労働によって規定されるとし、これによって経済全体を規定するという価値学説⁽¹⁾」とある。またインターネット上で代表的なフリー百科事典「ウィキペディア」では、「人間の労働が価値を生み、労働が商品の価値を決めるという理論。アダム・スミス、デヴィッド・リカードを中心とする古典派経済学の基本理論として発展し、カール・マルクスに受け継がれた⁽²⁾」とある。

通説を一般に広く知らしめるための辞書・事典という性格からすれば、上記の記載内容は労働価値説の通説と言えるのかもしれない。しかし通説的な理解すら無視しているかのようになり、労働価値説に対しては様々な解釈というか、おかしな理解、的外れではないかとの類の批判、ひどいものになると偏見や蔑視のような扱いが多く見られる。労働価値説に限ったことでもないが、インターネットが発達し情報の発信と入手が簡単になった今日、何か一方的な情報や回答が出回り、困ったことにそれが安直に了解され、「ベストアンサー」などの扱いを受けながら、真しやかに世上で大手を振ってまかり通っていることが多々ある。そこではまったく本来の趣旨からは逸脱した理解を得ながら、しかしそれで得心されてしまい、それが世上で通常一般的な把握・認識・理解となっていることが多くあるのではないか。こうした危惧を抱いているのは筆者だけではないだろう。労働価値説に話を戻せば、その説や論理がマルクスや社会主義とも関係することから、個人的思想の好悪と合わせて、インターネット上では誠に聞くに堪えない理解・解釈・主張が散見される。超越的な立場を取るつもりは毛頭ないが、本稿でそうした偏見や悪意の類に満ちた解釈を取り上げ、議論する意図や余裕すらもない。労働価値説に対して曲解や誤解を持つ者においては、本稿の行を追うに従って修正されるのを願うのみである。

労働価値説に対する曲解や誤解を払拭するためにも、本稿で労働価値説とは一体どういったものであるのかを探るのだが、そのためには何としてもやはり労働価値説の源流にまで遡って

確認していく必要がある。古典派経済学の基本理論として発展し、カール・マルクスに受け継がれたとする労働価値説、その源流は18～19世紀の古典派経済学をさらにさかのぼり、17世紀のウィリアム・ペティ（William Petty, 1623～1687年、イギリス）に一般的に求められている。ペティは古典派経済学（「近世の経済学⁽³⁾」と言った方が正確であろう）あるいは統計学の始祖とも言われ、マルクス（1818～1883年）およびエンゲルス（1820～1895年）も確かにペティを労働価値説の始祖とする扱いをし、著作の中で彼を大いに評価している⁽⁴⁾。

労働価値説に今日的視点の論題をからめていけば、ワーキング・プアーや貧困化が問題視されている現代社会において、労働価値説の今日的な意義を現在の視点で探っていくことが、一定の意義を持つと考えられる。そのためにも、迂遠なようでもあるが、ひとまず労働価値説登場の源流にまで遡って、その説は一体どういう背景で現れ、何を主張したのか、それらを上記のような誤解・曲解の払拭とも合わせて、改めて確認していく。

第1節 事前確認事項

ペティという17世紀の人物の著作・研究にいきなりに入る前に、以下いくつかの確認と了解を済ませておくことが、次節以下の行論の便宜にかなうはずである。

まず当然かもしれないが、労働価値説という言葉自体ペティの著作には当時まだ存在していない。さらに奇異に感じるかもしれないが、時代が下って19世紀のマルクスの著作を探ると、彼の著作の中にも労働価値説なる定義語句は見当たらない。マルクスは周知のように、商品の価値を社会的な労働と、はっきり定義して論を進めている⁽⁵⁾が、しかし労働価値説という定義語句を用いてはいない⁽⁶⁾。マルクスの『資本論』の中に「Kapitalismus 資本主義」という定義語句が登場していない⁽⁷⁾のと同様に、「マルクスの資本主義論」「マルクスの労働価値説」なる表記は、厳密に言えば後世の造語と言える。ではこの「労働価値説」という言葉を、最初に用いた者は一体誰なのか？ これに関しては、本稿の課題対象から逸脱していくため筆者の今後の追究課題としておくが、何しろ労働価値説という定義語句が登場するのは、マルクスより後である⁽⁸⁾。本稿では17世紀にはまだ「労働価値説」なる定義語句が存在していないことから、「労働価値説的な考え」と表記することもある。

次に、価値論あるいは価値学説の中に、二大潮流として客観的価値学説と主観的価値学説があるとされており、前者の代表格がこの労働価値説で、後者は効用価値説であると、このような説明あるいは分類分けがなされる⁽⁹⁾。こうした二極化・二項対立なる定義と分類分けは簡明であって、確かに理解しやすいものである。しかし筆者は、そうした安易な二極化・二項対立なる理解でいいのかどうか、少々の疑問を持たざるを得ない。この点については、本稿を読み進めていくうちに理解されるであろう。ここでひとまずおさえておきたいのは次の二点である。上述のように労働価値説という定義語句が存在していない以上、当然主観的価値学説や

効用価値学説という定義語句もまた 17 世紀当時まだ存在していない。この点と、しかしそうした定義語句が存在しないからといって、効用価値学説のような説も当時まだ存在していなかったというものではない。この二点である。経済的な価値を定義するにあたって、商品の価値を使用価値と交換価値とに区別し、生産や労働の面ではなく、個人の主観また効用の面に重きをおいて評価しようとする見方は、古く古代ギリシャのアリストテレスの頃から存在していた。それについては数々の経済学史の著作が記すところである⁽¹⁰⁾。このような主観や効用に価値を求める見解は古来よりあったのであるが、問題はそれが 17 世紀当時の労働価値説的な考えとどういう関係にあったのかである。この点も本稿で見ていくこととなる⁽¹¹⁾。

第 2 節 労働価値説の意義・特長

筆者は労働価値説の意義・特長を、生産の論理と交換の論理、この二つに分けて捉えたい。

① 労働価値説の源 生産の論理

ペティの著作と研究⁽¹²⁾の中で、特に労働価値説の面で評価されるのは次のとおりである。

まず何と言っても、ペティの『租税貢納論』の中の有名な一節、「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素 (active principle) である⁽¹³⁾ (Petty [1662] p.68. / 119 ページ)。」ここにペティの考えが集約されているとよく言われている。これについて、ペティの理論は土地と労働の二元論であるとか、様々な批判は可能である。しかしそうした批判とは別に、評価されるべき内容は以下の点にある。

まず時代背景とそこに存在していた理念・政策から確認していけば、次のとおりである。従来あるいは 17 世紀当時のイギリスにおいて、どうすれば国家・国民を経済的に豊かにできるのか、こうした国富増進の課題が存在していた。当時一般的に用いられていた理念と政策は、いわゆる重商主義と言われるものである。それによれば、金・銀・財宝などの貴金属、財貨、貨幣、国富、これらを同義と考え、それらを当国にもたらすことができるのは、鉱山を持たないイギリスにあっては、ただ外国貿易によるしかない (Mun [1664] pp.3-4, p.14. / 16, 21, 23, 39 ページ)。つまりは貴金属・貨幣イコール富とみなし、その獲得と方策は、国外からもってくる貿易を重要視する。あるいはその考えと政策を国内に適用してみた場合、貨幣=富を獲得するためには、貿易と同様に“流通”過程や取引交換を重視し、単純に言えば売りと買いの差から貨幣・富は得られ蓄積される。こうした考え方が一般的であった。

これとは別にペティは、富に関して貴金属・財貨とみなすのではなく、「土地・家屋・船舶・諸物品・家具・鉄器」等々の生活必需品、そして最後に「貨幣」としている (Petty [1662] p.34. / 63 ページ)。そしてそうした富や生活必需品は、単なる“流通”取引から生じるのではなく、“生産”という本源的な活動によって生み出される。ここに富の源泉を見るべきだということを主張したのである⁽¹⁴⁾。つまり、この生産、それを能動的に行なうことができる“労働”、ここにこ

そ根源的または本来的な重要性がある（いわば価値がある）という認識や評価を与えたのである。ここに労働価値説の源としての意義がある。

詳述すれば次のようになる。人間が生きていくためには、生活に必要なものを消費しなければならない。そのためには、自然や原材料に働きかけて、生活に必要なものを獲得しなければならない。有形あるいは無形のサービスであれ、何しろこのような生活必需品などを生み出す（生産する）ことができるのは、唯一労働のみである。「以前のまた過去の労働の成果（Petty [1662] p.110./179 ページ）」であり、労働のおかげ・恩恵である。そうした労働の恩恵を受けて、我々は生活必需品を入手できている。自身で労働を行なって生活必需品を獲得するか、他が生産してくれたものを頂くか購入するか、いずれにせよ誰かが働いて生産してくれたものを我々は享受するのである。自他の労働による有形無形の生産物の恩恵を受けなければ、我々は生活できない。人間の生活に必要なもの、使用価値と言ってもいいが、そうした我々の生活に必要な価値あるものを生み出すことができるのは、このように自他いずれかの労働のおかげ・成果である。その生産活動こそが我々の生活を支える基盤であって、それを可能にしているのは人間の労働である。後に見る消費者の主観・効用・需要がと、いくら声高に言ったところで、労働と生産がなければ何も生み出されはしない。根源的というのはこういう意味である。

こうした認識・観点に立脚すれば、人的労働という生産活動によって生み出される生活必需品が豊かにあることが、まず国富増進の第一歩である。重商主義（あるいは重金主義）が重視する金銀・財貨・貨幣は、流通取引の際の交換手段である。その際確かに、それら金銀・財貨・貨幣は、豊かさや価値を測る指標として役立ち、機能し得る。また長期間の保存に耐え得るから、将来の交換のために保蔵することにも役立ち得る。しかし本来的に生産活動によって生活必需品が豊かに存在しなければ、そうした交換も流通取引も発生しない。人的労働という生産活動によって生み出される生活必需品が豊かにあることが、まず国富増進の第一歩であるとは、こうした意味からでもある。

このように、自然あるいは原材料に働きかけをできる人間の労働が、価値を生み出す主導的源泉または能動的要因と捉え、こうした労働の意義を尊重する。以上のような認識が、土地（ここには当然海・山を含めて「自然」と言ってもよいであろう⁽¹⁵⁾)が富の母であり、労働が富の父であって、その能動的要素である、このような言明をペティは与えた。

そして、こうした理解・認識あるいは観点に立つことが、労働価値説なるものの初発・スタートである。この認識と理解は後の古典学派、そしてまたマルクスにもつながっているところであって、現代の我々においても労働価値説とはこうした観点のものであることを、まずしっかり認識し理解することが極めて重要である。

② 交換の論理 投下労働量による等価交換の論理（価値形態論の源）

このような観点と認識に基づいて、ここからさらにペティは自身の論理を築き展開させてい

く。彼は上述の認識・理解からさらに、「貨幣のみを持ってしては、わが国の富の相違を示すことはできない (Petty [1662] p.51. / 90 ページ)。「諸物品の相対的優良性を、貨幣という共通の標準によってではなしに、相互比較によって既述すべき (Petty [1662] p.50. / 88 ページ)」とし、「すべての物は、土地および労働によって価値づけられねばならない (Petty [1662] p.44. / 79 ページ)」として、上記で重視した土地と労働を評価基準の根本において、ここから投下労働量による等価交換の論理を築き展開させていく。

その論理展開は次のとおりである⁽¹⁶⁾。従来、1 ブッシェルの穀物を生産できる労働時間と、銀1 オンスを獲得できるのに、同じ労働時間が費やされていたとする。この場合、1 ブッシェルの穀物は銀1 オンスという価格で取引される。ある時、安易に採掘できる鉱山ができ、今まで銀1 オンス獲得できていたのと同じ労働時間で、今度は銀2 オンスが獲得できるようになった。こうなると、1 ブッシェルの穀物は銀2 オンスという価格での取引になる (Petty [1662] p.44, pp.50-51. / 79, 89-90 ページ, Petty [1691] p.183. / 141 ページ以降)。

まさにここに投下労働量による等価交換の論理とその原型⁽¹⁷⁾が提示されている。ここでは見てのとおり、重商主義 (あるいは重金主義) が重視した金銀・財貨・貨幣、これに不変・普遍の尺度をおいているのではない。上記のように銀などの金属貨幣であっても、価値が変わるのであって、その価値を変えているのは先に重視した労働であり、その生産性である。このように評価基準あるいは不変の尺度として、特に生産的労働を重視していることが改めて認識できる。

さらにこの投下労働量に価値基準を定めて、さらに等価交換の論理を発展させていったのは、マルクスの価値形態論であることは周知のことであろう。ペティにはその原型が示されていると捉えることができる。同時に、マルクスが彼を大いに評価していたのもここで理解できる。

第3節 批判と反批判

①ここまでの批判

以上、労働価値説の源流を見たが、ここまでですでに労働価値説についていくつかの批判があることは周知のとおりである。それを検討していくが、本稿ここまでの内容に対して、特に以下の批判が重要である。それは労働価値説には需要や希少性の側面、また消費者側の主観が欠けているというものである。例えば、ペティなど古典派経済学以前の価値論を詳しく検討した鈴木勇氏は言う。労働価値説 (論) の再検討にとって必要と思われる若干の問題として、「労働価値論は商品の価値をそれを生産するのに必要な労働の大きさのみで規定し、需要や希少性の問題を価値規定から排除しているが、まさにこの点に労働価値論の致命的な欠陥をみることができる。[中略]『価値』なるものを供給側の労働にのみ求め、需要側の人びとの主観的心理作用は日々の市場価格の変化の範囲に閉じ込めてしまい、これを無視してしまう。[中略] 要す

るに、商品の価値規定にはそれを受容する人びとの主観的判断が入らざるをえず、これを排除することは不可能だ。⁽¹⁸⁾」

労働価値説に対するこうした批判はよく聞かされる。本稿第1節でもすでに取り上げたが、価値論を客観的価値学説(その代表が労働価値説)と主観的価値学説(その代表が効用価値説)と、二極化あるいは二項対立的に分類して、特に主観的価値学説なる側の見解を支持する方面からの批判が、上記のものである。ここではこの批判について今までの考察と合わせて考えてみたい。

②上記への反論

上記のような批判に対して筆者が特に疑問とするのは、第一に元来労働価値説は、需要や希少性の側面また消費者側の主観を、そもそも排除し無視しているのかという点である。消費者が多数集まる市場なり、一対一の相対取引なり、何しろ商品交換が行なわれる際に、消費者側の需要を考えない生産者が、そもそもいるものなのだろうか？ 希少性や消費者側の需要や主観や価値判断を無視して、市場に製品を持ち込む生産者がそもそもいるのだろうか？ そのようなことはないはずである。売れるべき、需要がある商品を生産するのである。需要があるからこそ、生産を行なうのである。上記ペティの1ブッシェルの穀物なり、1オンスの銀にせよ、希少性と消費者側の主観を含めた需要などがあるからこそ、上記のように労働による生産が行なわれるのである。つまり、労働価値説が生産から交換の論理を展開する際には、すでに消費者側の需要や主観を当然の所与のものとして、前提として論を進めているのである。希少性や消費者側の需要や主観や価値判断を無視しているわけではなく、その上に論を進めているのである。

この点をペティの主張で確認してみよう。(彼の場合、価値と価格が混在しているのだが⁽¹⁹⁾、)「牧草の価値は、この土地の近くに住む人民数の多少、ならびにかれらの生活がぜいたくか、つつましいかによって多くもすくなくもなるのである。否そればかりではなく、これら人民の社会的・自然的・宗教的見解にしたがって多くもすくなくもなるのである (Petty [1662] p.90. / 88-89 ページ)。「[価値が] 自然的に高いか安いかは、自然的必需品 (necessaries of Nature) の生産に不可欠な人手の多少に依存すること、[中略] また同時に、気候に左右されて、世人が必然的にあるいは多く、あるいはすくなく、[穀物を] 消費する気になるに応じて [穀物価格も上下する] (Petty [1662] p.90. / 155 ページ)。「目新しさ・驚き・高貴な人たちの手本・調査しがたい結果についての評価のために、物の価格は増加したり下落したりもする (Petty [1662] p.90. / 156 ページ)。」このようにペティにおいても、消費者側の需要やら主観あるいは価値判断を無視しているということはない。それらを取り入れ、前提として論理を展開しているものと考えられる。

こうした消費者の需要やら、消費者にとって価値ある商品が生産された後に、取引なり交換

が行なわれるのであって、その際の交換・取引の関係と比率は、前節①で最大限重視された労働の多寡に基準をおいた原理に従えば、ペティが示すとおりとなろう。つまり、様々な消費者側の需要・主観・価値判断が錯綜する中で、取引交換に際して相場という値、社会的に一般的・平均的に妥当とされる一定の交換比率、これらが決まっていく。それはどのようにして決まっていくのであろうか。ここを追究しなければならないのであって、追究していくと、個人的にすべて違う需要・主観・価値判断を捨象し、蒸留していくと労働量という上記の共通因子が残るわけで、この点に関しては特にマルクスによって徹底されているところである⁽²⁰⁾。その際、需要や主観なりを無視したわけではない。前提としているわけである。交換が行なわれる際の消費者側の嗜好・需要・主観等々の個人的な価値判断を、逆に交換の論理の中に組み込んでしまうと、消費者側の嗜好やら需要・主観等々の価値判断は各人によってすべて違うのであるから、例えば上記の1ブッシュルの穀物=銀1オンスというような、その社会に一般的・普遍的に登場して固定化されてくる一定の相場というものの存在が解明できなくなってしまう。

以上の考察からすると、既述のような、需要や希少性の側面また消費者側の主観を、労働価値説はそもそも排除し無視しているという批判は、筆者は当たらないものと考えている⁽²¹⁾。また、価値論を客観的価値学説（その代表が労働価値説）と主観的価値学説（その代表が効用価値説）と安直に二極化・二項対立的な分類分け、そしてその把握から、労働価値説は需要や希少性の側面また消費者側の主観を排除し無視しているという把握・理解は、疑問である。

資本主義の発展また生産力の発展によって、商品生産が以前より容易となり、消費選択の範囲が広がった。となると、重要なのは商品の生産面だけでなく、消費者側の価値判断も重要視されるようになってきた。このような状況下、いわゆる「限界革命」の後、商品の効用を重視した論理や価値学説が展開してきた⁽²²⁾。効用や限界効用を重視する方々は、いくらその商品に労働が費やされていようとも関係はなく、完全に消費者の主観なりを重視して論理を打ち立てていくわけであるから、従来の労働価値説に対しては上記のような批判やら評価を与えがちとなろう。しかし、そうした商品の効用や消費者側の主観・評価を過大に重要視するあまり、労働価値説が本来的に需要や希少性の側面、また商品の効用や消費者側の主観を排除し無視していたという即断・裁断は、筆者は本稿今までの考察からして、行き過ぎた批判であって当たらないと考えるところである。

第4節 労働価値説の現代的評価・意義（結びに代えて）

労働価値説の源流からその説を再確認し、また代表的な批判とその反批判を示してきた。これらの考察を基に、改めて今日的視点から労働価値説の現代的意義を考え、結びに代えていきたい。その現代的意義とは、第2節①で示した生産の論理にあると考え、これを再評価したい。人間にしかない労働という生産活動によって経済が支えられており、それが社会存立の基盤で

ある。これは不易の真理であろう。その重要性に着目する労働価値説の意義は、今日においても色あせはしないであろう。その詳細な展開は別稿で示したいが、本稿との関連でこの現代的な意義や重要性は、以下との比較でさらに明瞭となるのではないか。

と言うのは、注の2で示したような「限界革命」以来の労働価値説の一般的理解把握からすれば、人間の持つ労働力、人間が行なう労働は、もはや他の生産要素と全く同じであり、完全にコストの一部である。そうした理解把握に加えて、数学的分析を交えて展開される分析結果こそが「科学 (Science) 的な経済学」であるという捉え方や認識も可能であろう。しかし逆に言えば、それは「人間不在の経済学」とも言えるところである。

人間の労働を完全にコストの一部とみなすような把握であれば、利潤追求を至上命題とする社会にあっては、コスト削減、人件費削減などは正当な行為であり、であればそこから生じる今日的デフレ不況などというものは、当然の帰結でもある。さらには貧困化やワーキング・プアー等々の今日的な労働問題とて、起こるべくして起こる当然の社会現象ではないか。ではどうしていけばいいのかという問題は正・政策提言を、本小稿で示しきることはできない。ただこの小稿で言えることは、そのような今日的な労働問題の深遠は、人間労働を単なるコストと捉える上記のような把握、そしてそれによって打ち立てられる経済学にあるとも考えられる。

労働価値説の源流を訪ね、いわゆる祖師方やあるいはその後継者が人間の労働を単にコストとみなしていくのではなく、正当に評価していくという視点を本小稿で得ることができた。この点を今日的な表現で見直していけば、人間にしか行なえない労働を基礎とした観点に立ち、人間が行なった有意義な労働を正当に評価し最大限重視し尊重していくことは、人間の基本的な人権を尊重していくのと同じくらの意味合いを持っている。このように筆者は考える。

注

(1)金森他 [1993] 1260 ページ。

(2)<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8A%B4%E5%83%8D%E4%BE%A1%E5%80%A4%E8%AA%AC> ちなみに同サイトには、「1870年代に [中略] 労働価値説は彼ら [ジェボンズ, メンガー, ワルラス] の学説にとって、『労働力を生産過程における唯一の希少な資源と仮定する特殊モデル』として整理され、以後、[中略] 今日に至っている」ともある。こうした理解が、旧来の「近代経済学」的な一般的な理解というところであろうか。そうした理解が妥当であるかどうか、本稿では確認していく。

(3)大内・松川 [1952] 222 ページ。

(4)マルクス・エンゲルスによるペティへの好評価はいくつもある。一例として、「近代の経済学の創始者ペティ。」「彼の著書『租税貢納論』(初版, 1662年)のなかで、ペティは、商品の価値の大きさについて完全に明瞭な、正しい分析をあたえている。」「この最も天才的で最も独創的な経済学者。」(F. Engels [1962] S.216-218. / 240-242 ページ。以下、欧文からの引用を取り入れる場合は、「原典ページ / 和訳ページ」のように記す。)なお、この『反デューリング論』はエンゲルス著作の名があるが、引用箇所はマルクスの筆になるものと言われている(大内・細川 [1968] 671 ページを参照)。

(5)一例として、「どのようにしてその価値の大きさははかられるのか? それに含まれている『価値を形成する実体』, すなわち労働の、分量によってである。」(Marx [1867-90], Band 23, S.53. / 第1分冊, 66 ページ。)
「商品の価値とはなにか? 商品の生産に支出される社会的労働の対象形態 (Gegenständliche Form) である。また、われわれは、この価値の大きさをなにによってはかるのか? 商品に含まれる労働の大きさによってである。」(a. a. O., S.557. / 第4分冊, 915 ページ。)

(6)全集刊行委員会 [1991]。

(7)重田 [2002] 4 ページ。

(8)有名な著作の中で「労働価値説」なる定義語句が登場するのは、筆者が拙速ながら現在確認している限りでは、シュンペーターの初期 [1908] の著作であり、和訳本の 121 ページの注に一箇所見ることができ、原典 (p.58) には「労働価値説」なる語はない。同書には価値概念・価値原理について論じた章が第四章・第七章などいくつかあるが、シュンペーターは労働価値説と言う代わりにどういう語句の表記や用い方をしているかという点、「われわれはこの [価値] 原理に、マルクスが労働原理 (Arbeitsprinzip) から引き出しているような結論を結びつけない」とある (p.53. / 117 ページ)。また同書では、シュンペーター自身が価値原理 (Wertprinzip, p.53. / 131 ページ) として立脚する効用・希少性に対して、労働価値説的ニュアンスには、「労働説 (Arbeitstheorie) (p.56. / 121 ページ)」、「費用原理 (Kostenprinzip) (pp.57. / 122 ページ以降) なる語が多用されている。それから約 50 年後のシュンペーター [1954] の著作では、「労働 (数) 量価値論 (labor-quantity theory of value) (p.590, 598. / p.1241, 1258 ページ) なる語が使用されている。断定はひとまず控えるが、この時期とこれらの語が「労働価値説」なる定義語句に先導する時期と語なのであろうか。

(9)例えば、Schumpeter [1954] p.1259. / 7 巻, 114 ページ。平瀬 [1979] 41 ページ。

(10)例えば、Schumpeter [1954] Part II Chapter 1. / 第二編・第一章、鈴木 [1991] 第 1 章。

(11)付随してさらに認識しておくべきことは、『新約聖書』の「テサロケニア人への第 2 の手紙」第 3 章・第 10 節の中に、「働かざるもの食うべからず」という有名な一節がある。聖書にこのように記載されていることからすれば、特にキリスト教文化の中にいる人々の精神や意識には、「働かざるもの食うべからず」という規範・倫理観は、かなりの程度浸透していたものと考えられる。労働価値説と言った時、それは学説的な主張とは別に、かような倫理的・規範的意味合いを含むこともある。この点は注意を要するところである。しかしこうした倫理的・規範的な意味合いとは別に、経済学的な学説として、17 世紀のペティはどのように労働価値説的な考えを展開していったのか、それが本稿の追究課題である。また本稿を通して、筆者による労働価値説の現代的な規範・倫理・意義・重要性を考える。

(12)ペティの著作と彼についての研究に関しては、数々のものを参考にした。本稿に関するものだけを挙げると、Petty [1662, 1664, 1690, 1691, 1695], 稲村 [2002], 渡辺 [2000] 鈴木 [1991], 松川 [1977, 1952], 馬渡 [1975, 1997]。

(13)ペティのこの有名な指摘は、当時のまたそれ以前 (古くはアリストテレス) からの思想であって、理論化したのがペティという。これらの点に関しては、Petty [1899] pp.377-378. / (邦訳なし), 松川 [1977] 383 ページを参照。

(14)後にペティは「金・銀および宝石は普遍的富である (Petty [1690] p. 259-260. / 150 ページ)。」という指摘を行なっているが、この点については、当時ペティはいまだ重商主義の見解から完全には抜け切れておらず、重商主義的な思考も混在していた、という解釈が的を射ていると考えられる。この指摘については、渡辺 [2000] 第一篇・第一章・第五節に詳しい。

(15)この点については、渡辺 [2000] 45 ページに同様な指摘がなされている。なお、先に示した重商主義の代表者として有名なマンであっても労働の意義を評価しており、それは彼の著作にて散見される。例えば、Mun [1664] Chap. III. 12, p.59, 70. / 第三章の十二, 113, 132 ページ。

(16)この箇所は論者によって若干の異論がある (鈴木 [1991] 123-124 ページ参照)。筆者は検討の結果通説に従った。なお、本文では訳文どおりではなく、解りやすい表記にしてある。

(17)さらなる原型はアリストテレスと言われている。その点については、鈴木 [1991] 8 ページ以降に詳しい。またこのアリストテレスに関するマルクスの有名な指摘として、Marx [1867~90], Band 23, S.73-74. / 第 1 分冊, 101-102 ページがある。

(18)鈴木 [1991] 248 ページ。

(19)これに関しての詳しい検討は、渡辺 [2000] 65 ページを参照。

(20)こうした消費者側の需要・嗜好・使用価値・主観等々の価値判断を捨象した上で論理を展開させていく方法は、マルクスの価値論において大いに追究されているところである (Marx [1867-90], Band 23, S. 53. / 第 1 分冊, 66 ページ)。

(21)需要や希少性の側面、また消費者側、使用者側の主観・評価、いわば使用価値の側面を、労働価値説はそもそも排除し無視しているという批判は、おそらくマルクスの次の言明を逆手に取った理解ではないか。マルクスの著作の中で使用価値に対して、どうでもよい (gleichgültig), 無関係 (Gleichgültigkeit), 経済学の考察範囲外である (liegt jenseits des Betrachtungs Kreises der politischen Ökonomie) と、指摘している箇所が確かに見受けられる。また、交換価値の分析を重視するため、使用価値を捨象 (Abstraktion) していく論点は、『資本論』冒頭のマルクスの有名な言説である。このように、確かに

マルクスの著作の中に使用価値を度外視する (absehen von Gebrauchswert), 使用価値を捨象, 等々の文言がある。ここから, 交換価値から使用価値を分離し排除し, 交換価値と使用価値とはなんら関係りもないものとし, 使用価値を価値形成から排除し, 社会的価値形成とはなんらの関係ももたないものとしたというように, 労働価値説がそのような価値学説だと安直に受け止められる含みはあったかもしれない。しかし, これらについての詳しい検討は, 深澤 [2010], また深澤 [2012] の終章を参照されたい。

(22)これらの指摘に関しては, 平瀬 [1979] 50 ページ。

参考文献

- 稲村勲 [2002] 「重商主義時代における経済学の胎動—ウィリアム・ペティの経済学—」竹本洋・大森郁夫 [2002] 『重商主義再考』日本経済評論社。
- 金森久雄・荒憲治郎・森口親司編集 [1998] 『有斐閣経済辞典』(第3版) 有斐閣。
- 重田澄男 [2002] 『資本主義を見つけたのは誰か』桜井書店。
- 鈴木勇 [1991] 『経済学前史と価値論的考察』学文社。
- 全集刊行委員会編 [1991] 『マルクス・エンゲルス全集』別巻4, 大月書店。
- 平瀬巳之吉 [1979] 『経済学総論』未来社。
- 深澤竜人 [2010] 「労働価値説(投下労働量分析)と自然・環境・使用価値との関係の検討—イムラー『経済学は自然をどうとらえてきたのか』の労働価値説批判への反論—」山梨学院大学経営情報学部『経営情報学論集』第16号。
- [2012] 「投下労働量分析の発展と展開」“The Application and Evolution of the Labor Embodied Analysis.”(明治大学大学院政治経済学研究科 2011年度博士学位請求論文) 明治大学図書館。
- 松川七郎 [1952] 「労働価値説の生成に関する一考察」一橋大学経済研究所編集『経済研究』第3巻・第3号, 岩波書店。
- [1977] 『ウィリアム・ペティ』(増補版) 岩波書店。
- 馬渡尚憲 [1975] 「W. ペティの経済学(上・下)」東北大学経済学会『研究年報 経済学』第36巻・第4号, 第37巻・第1号。
- [1997] 『経済学史』有斐閣。
- 渡辺輝雄 [2000] 『渡辺輝雄経済学史著作集 I 創設者の経済学』日本経済評論社。
- Friedrich Engels [1876] *Anti-Dühring*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 20, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, Dietz Verlag, 1962. フリードリッヒ・エンゲルス『反デューリング論』大内兵衛・細川嘉六監訳 [1968] 『マルクス=エンゲルス全集』第20巻, 大月書店。
- Joseph Schumpeter [1908] *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Düsseldorf, Verlag Wirtschaft und Finanzen, 1991. 大野忠男他訳 [1983-84] 『理論経済学の本質と主要内容(上・下)』岩波書店。
- [1954] *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press. 東畑精一訳 [1958-62] 『経済分析の歴史(1~7)』岩波書店。
- Karl Marx [1867-90] *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 23-25, a. a. O., 1962-1964. 資本論翻訳委員会訳 [1982-89] 『資本論』新日本出版社。
- Thomas Mun [1664] *England's Treasure by Forraign Trade*, Oxford, Basil Blackwell, 1949. 張漢裕訳 [1942] 『外国貿易におけるイギリスの財宝』岩波書店。
- William Petty [1662] *A Treatise of Taxes & Coutributions*, in *The Economic Writings of Sir William Petty*, Edited by Charles Henry Hull, 2 vols., London, Cambridge University Press, 1899. 大内兵衛・松川七郎訳 [1952] 『租税貢納論』岩波書店。
- [1664] *Vernum Sapienty*, in *ibid.* 大内兵衛・松川七郎訳 [1955] 「賢者には一言をもって足る」同上書に所収。
- [1690] *Political Arithmetick*, in *ibid.* 大内兵衛・松川七郎訳 [1955] 『政治算術』岩波書店。
- [1691] *The Political Anatomy of Ireland*, in *ibid.* 松川七郎訳 [1951] 『アイアランドの政治的解剖』岩波書店。
- [1695] *Quantulumcunque concerning Money*, in *ibid.* 松川七郎訳 [1958] 「ペティの『貨幣小論』」
- 森戸辰男・大内兵衛編 [1958] 『経済学の諸問題』法政大学出版局。